

さんばそう  
三番三の構造 3  
「揉ノ段」のダイナミズムとその意味

中村美也

本研究では、「式三番」(通称「翁」)の中で狂言師が舞う「三番三」(大蔵流)を取り上げる。この舞踊は一般的には他の例を見ない特異なものであると言われており、それが又この舞踊の魅力とも思われる。そこでその魅力の起因、則ち表現の特質及び芸態の源流を探ろうとするものである。

【目的】今回は部分的なところにスポットを当て、細部の構造より全体像を眺めようと思う。前回では、三番三の曲に於ける舞と囃子は、〈拍子〉を共有点に表裏一体の関係をなし、相乗作用を持つということ論じた。舞の足拍子はすべて笛の唱歌に合わせて踏むことになっている。そこで笛の唱歌とその拍子、またその音量からダイナミズムやリズムパターンを調べ、大小鼓の拍子との関連をみてゆく。そしてこれらの表現の特徴に内包されている意味について考えたいと思う。

【方法】前回に引続き「揉ノ段」の実演観察を中心とし、稽古実践や実演の取材で得た資料を基に文献からはこの舞踊の機能や歴史的背景を調べ、音量測定器によりダイナミズムを譜や図に分析し、視覚的に捉えることに努める。

【結果】1) 拍子の特徴(表(1)図(2)参照)

a. 足拍子、笛、鼓共①③⑤⑦⑨拍を強調する傾向が見られる。b. 明確で規則的な刻みを持つ。c. 八拍子を基本とし、きちんと構成整理されている。

2) ダイナミズムの特徴(図(1)(2)譜(1)参照)

a. 笛のフレーズや鼓方のカケ声には、リズムパターンの第一拍目に強調が見られる。b. 反復のパターンを持つ。c. 笛の唱歌から〈円環→螺旋構造〉が引き出せる。d. 始めから終わりへ向かうに従い次第に急調となる。e. 小鼓の拍子から「はねるリズム」(附点音符)が見つけられた。

3) 笛と大小鼓の相互関係(図(4)譜(1)(2)参照)

a. ①③⑤⑦拍の強調が見られる。b. 小鼓の拍子は奇数拍、大鼓はほぼ偶数拍より成る。c. 大小鼓の拍子には①③⑤⑦拍を強めるカケ声が入る。

【考察】1) 拍子については陰陽道との関連性が推察される。則ち、足拍子は日本民俗芸能に於いては「反閉(へんぱい)」と言われる動作に由来していると言われており、折口によるとこの反閉は陰陽師の呪術の一番大切なもので、たいていは五字七字九字の漢字を並べた文句の唱え事しながら足踏みをした<sup>1)</sup>。五来は反閉を「マジカルステップ」と名付けている<sup>2)</sup>。

2) ダイナミズムの意味

第一拍目の強調——小島によると、一拍目を強調しながら反復される一定のリズムパターンは、刻々と密度を高めて行く緊張感の連続であり、集中へ向かう一つの方法である。これは修験・田楽・念仏踊りの各リズムに共通のもので、これらはシャーマニズムの音楽にみられる要素を満たす<sup>3)</sup>。

「はねるリズム」——小鼓にみられる「はねるリズム」にのって踏まれる足拍子は「快活な興奮状態の気分」<sup>4)</sup>を引き起こす。又「揉ノ段」の躍動感をつくりだす根幹となっている。

明確な拍節・カケ声——小泉によると、生き生きとしたリズムは、叙事詩的、心情をあらわしたセンチメンタルなものではなく、没个性的、共同体験の感興を主にし、舞手・囃し手の精神的引力を一層強める。又この表現形態は、古い儀礼に結び付いたものである<sup>4)</sup>。

以上の結果から、三番三「揉ノ段」は音楽的にはリズムを主体とする表現形態を持っていると言えよう。時実利彦は、

「歌(音楽)には、リズム、メロディー、ハーモニーの要素がある。この中のリズムという要素は、理性、知性の座である新皮質系に対して、鎮静的、麻痺的な効果を及ぼす。……理屈抜きで脳をいじくりまわす能の改造、洗脳の原理である。……踊りも、皮膚や筋肉や関節などに加わるリズムカルな機械的な刺激の効果を持っており、それらの部位にある感覚器で受け止められて脳へ送り込まれる。信号は、同じように新皮質系の活動を弱める。従って、歌の持つリズムの魔力は、リズムカルな身体の動作によっていやがうえにも増強されてゆくのである。……歌はリズムと言う要素によって集団への凝集を図るような機能を持っている<sup>5)</sup>。」と歌や音楽や踊りの本質を脳の仕組みに照らし合わせて論じている。

三番三を見て、しばしば我々は非日常の世界へ誘い込まれるかのような経験をしますが、それは今回ここで明らかにしたような、呪術的とも言える特別な「しかけ」が内包されており、これが三番三が「特異だ」と言われる一つの由縁であろうかとも考える。

〈注〉1) 折口信夫「日本芸能史六講」講談社学術文庫 1991年

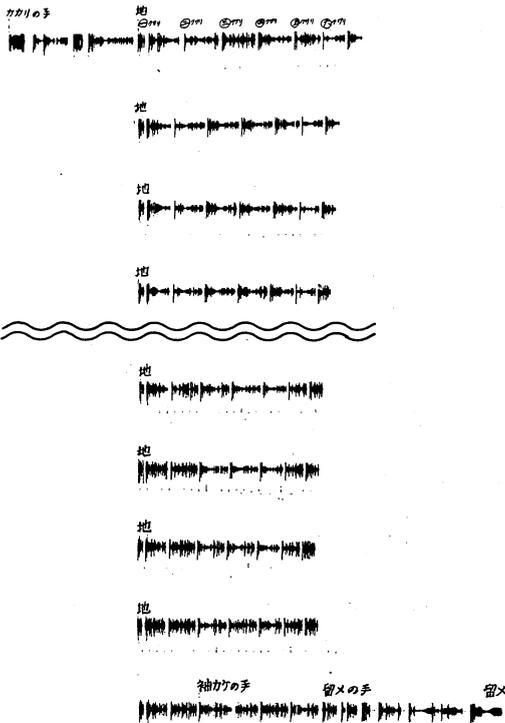
2) 五来重「修験道入門」角川書店 1980年

3) 小島美子「シャーマニズムの音楽」『日本のシャーマニズムとその周辺』日本放送出版協会 1984年

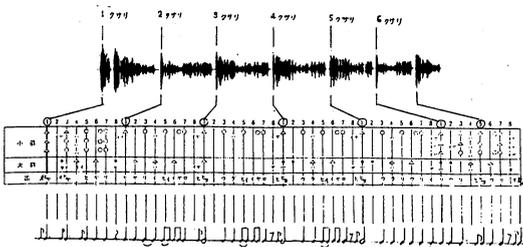
4) 小泉文夫「日本伝統音楽の研究 2」「リズム」音楽の友社 1984年

5) 時実利彦「人間であること」岩波新書 1970年 pp.46-47

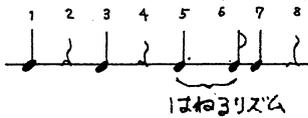
図(1) 笛の音量（「揉ノ段」カカリ～留メ）  
 ——反復パターンとそのダイナミズム——（部分）  
 （測定日時：1991年11月24日17：37）



図(2) 笛の地（一噌流）の音量と大小鼓の拍子型と唱歌



譜(1) 小鼓の地の拍子

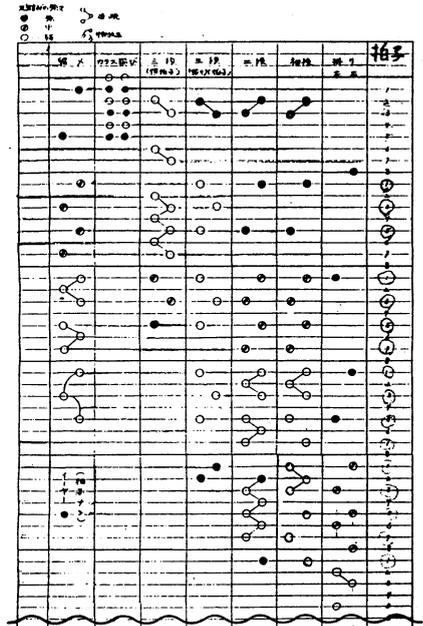


上の譜から、一ヶ所に付点音符が認められる。

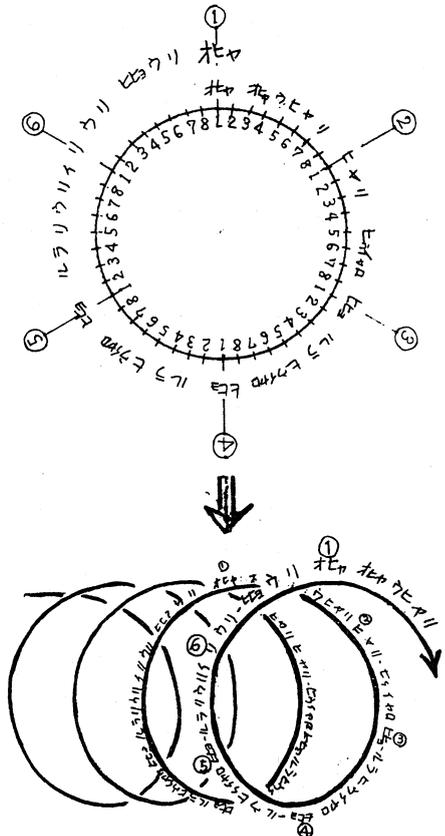
譜(2) 大鼓の地の拍子



〈表：(1)〉 三番三「揉ノ段」に於ける  
 各段の足拍子の拍子型（部分）



図(3) 揉ノ段の笛の地の「円環→螺旋」



図(4) 嚙子全体の円環図

図(3)と譜(1), 譜(2)-①を合成したもの

